

ブラームスの「16のワルツ」、全体を通して、ベロフさんとコラールさんで聴いたことがあるのかしら。いや、コンタルスキー兄弟、エデンさんとタミールさん、いずれにせよ4手、ソロでは初めて。前は15番を聴くため、他は聞き流していたのか、気に留めることはなかった、今回1曲1曲間近で相対峙。ショパンの「前奏曲集」やシューマンの「謝肉祭」のいでたち、これでもかこれでもかとアイデアの泉、惜しみなく披露。一つ一つが独立、キラキラとした輝き、珠玉の小品集。今日の演奏、最初は、沢山のモノを盛り込み過ぎ、セッカチ上滑り感。聴き手側の慣れ、次第に集中力の充実。7、8、9番、説得力ある出来、面白味を理解、心にジックリ。そして12番が最高、雄弁なアピール、有無を言わさず楽しく翻弄。左手にドッキリ、作品110番台に共通する作曲家のカゲを意識。髭もじやムサイ大男、物静かな雰囲気、重圧感。

シューベルトの「即興曲Op.90-3」、流れる軽快さと重苦しい引き摺り、妙な同居。鳥たちのサエズリ、ヒラヒラ装飾、ロマンチック仕様。後ろに、物静かな大人の追憶、ノスタルジア、何か重いものでもしょい込んでいる様な。ノーテンキに喜びに浸るコトは許されない。ベートーヴェンの「ロンドOp.51-1」、ユッタリとした遅めのテンポの中、控え目に主張、ドギツサのないスペインの色付け。小品でも全力投球、無味平坦作りでなく、自己アピール、一幅の絵。シュトラウスの「ワルツ」、イキイキハツラツ、ノリノリでごく楽しそうなピアニスト、華やかな舞踏会を彷彿。スマセン、小中学生の体育、壁の花だった自分には、今でもダンスはトラウマ、楽しめません。そんな自分が恨めしい。

歌曲は苦手、このHPで3人目の筈。モーツアルトさんとシューベルトさん、旋律に言葉を重ね合わせ、無理矢理の簡潔さ。ボソッとしたツブヤキ、ドイツ語ならでのゴツゴツ感。韻を踏んでいるのか、舌打ちに似たフレーズ止め、気になる語尾。言葉を理解出来ないから、訳詞にイメージを膨らませるが、想像力なさで困惑が先に立ち、声にまで気が回らぬ失礼。それに引き換え、ヴォルフさんは自由、制約からの解放、心にストレートにヒット。話し言葉の聴き易さ、声の張り凜々、語りに説得力、納得理解した様な気持。「少年と蜜蜂」がより耳には具体的、ほのぼのとした情景が目の前に結ぶよう。(2008.11.22)

モーツアルト：歌曲「ルイーズが不実な恋人の手紙を燃やしたとき」

モーツアルト：歌曲「クロエに寄す」

ベートーヴェン：ロンド ハ長調 Op.51-1

シューベルト：歌曲「糸を紡ぐグレートヒエン」

シューベルト：歌曲「ミニヨンの歌ーただ憧れを知る者だけがー」

シューベルト：即興曲 変ト長調 Op.90-3

ブラームス：16のワルツ Op.39

ヴォルフ：歌曲「春」歌曲「少年と蜜蜂」

J・シュトラウス2世/グリュンフェルドン：ワルツ
(アンコール)

シューべルト：歌曲「鱈」「ウィーン、わが夢の町」「忘れぬ草」
